
笑え王宮

日野枝 凜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑え王宮

【Nコード】

N9447N

【作者名】

日野技 凜子

【あらすじ】

「笑いを無くしたこの国に再び笑顔を」
突然の異世界訪問に戸惑う

女子高生、一之瀬 柊（イチノセ ヒイラギ）。

「笑わない王子様を笑わせろ？ 無茶言いますなっ！
笑いを取るのが得意ゆーても所詮高校生レベル。
呼ぶならなぜにM1王者をよばないのか……。
え？ おっさんだから？ ふざけんなあああっ！！！」

そんなこんなで進んで行くストーリー。ラブコメなのであしからず。
第一部はむっちゃシリアスでっけど（笑）
全然、主人公と王子様からまへんけど。
ま、それは読んでからの楽しみです。ほなねっ！

第一部

笑え私

「でね、お隣さんが叫んだのよ。『ゆうくんパンツ履きなさいっ
！！』」

その瞬間、教室中がドツと笑った。

お調子者の男子はもちろん、女子までゲラゲラ笑うそこには垣根な
んてない。

私の話なんか聞いてませんって澄まし顔でお勉強してる秀才くんの
肩が小刻みに揺れていることにまたニヤつく。

まあ、1オクターブあげられた私の声は見事にお隣さんちのお母さ
んそっくりで、思わず自画自賛するほどなんだから、それも当然よ
ね。

ほとんど交流がないお隣さんちの『ゆうくん』は夜中の三時まで大
学受験のために勉強する勤勉家だ。

だからって英語の発音練習を夜中することはないんだが、そのスト
レスはここで解消させてもらってるから良しとする。

「そしたらそのゆうくんがね、『履いてるよ母さんっ！！』って怒
鳴るもんだから、目が冷めちゃったよ。まだ朝の5時だよ？ まった
く、トイレ行きたびこのやり取りはないでしょ」

かわいそーっ、とそう言いながらも全然同情してなさそうな男子か
ら茶々が入る。

だったらあんたも経験してみる？なんて言ったあと「ゆうくんパン
ツ履きなさいっ！！」と叫べば、本日二度目の爆笑は必須。

結局ホームルームがはじまるまで、腹がよじれるほど笑こけた私た

ちはあごが取れてしまいそうだった。

一之瀬　？　柊（イチノセ　？　ヒイラギ）

花の十七歳、女子高生。　？？

ボブの髪は塩素と日光で傷んですっかり茶パツ。

スカートは膝より少し上くらい。

太ってはいないけど痩せてもいないと言われる私は極めて平々凡々な人間だ。

――人を笑わせることを除けばね。

人を笑わせるのが好き。

人と笑うのが好き。

少々背徳的な笑いは平凡な日常にスパイスを給付して、刺激的でハッピーな毎日に奇跡のビフォーアフターを遂げる。

近所迷惑も面白おかしく話してしまえばなんてことない。
苛立ちも笑いに変わるのだから、こんな幸せわないのだ。

『笑いこそが世界を救うのだ』

だからって、まさかこんな持論を異世界で証明させられる日がくるなんて思うわけなかった。

目覚め

始まりはいつも突然だ。

区切りなんて誰かが勝手につけるもので、人生は常に連続している。だからその日が当たり前の顔をしてやって来たことに私は気づかなかった。

――

――

――

暗闇のなかで目が覚める。

頭がぼーっとして、全身けだるい。

悲しきかな時間に囚われた現代人の性、むくりと起き上がって最初にしたのは時間の確認。

チカチカ目に痛い携帯の明るい画面の右上に21…38の数字。

一瞬で脳が覚醒した。

「げっ9時っ!？」

もう宿題は諦めて寝よう、なんて思って布団をたぐり寄せようとするも、あるはずのものが無い。

違和感を、感じた。

――空気が違う。

吸って吐いた空気は、生ぬるく排気ガスにまみれた人臭いものではない。

ひんやりとして、まるで雨が降ったあとの様な水々しい空気。足下は湿っていて、手を伸ばせばさわりと肌を撫でるような感触がある。

何より暗かった。

「まだ9時なのになんでこんな・・・ひっ!!」

がさりと自分が出した音に驚いて、お守りのように持っていたケータイが落ちる。

冷や汗がぶわっと吹き出す。

お腹の底が急に重くなった。

嘘っ、ケータイ!!!

たったひとつの頼れるものを落として、より恐怖を感じた。

なりふり構わずに恐ろしい闇に手について、ゴトンと音がした辺りを懸命にさぐる。

何も見えない、明かりがない。

そのことがぐるぐると頭のなかを回って吐きそうだ。

見つからなかったらなんて、例えば話でだってしたくなかった。

ガサガサと、私が地面をまさぐる音だけが大きな音でもないのに静な場所に響いて、不安は増長される。

何かがきたらどうしよう。

何かがきたらどうしよう。

焦りと恐怖が想像力を掻き立てれば、胃がキリキリと痛み出した。

「あっ！」

手をついた先に、地面が無かった。
バランスを崩した私は前のめりになって勢い良くゴロゴロ坂をくだっていった。

闇の中に手をのばした枝にぶつかる度にバットで殴られたような痛みがつかぬ。

ゴンっと一際強い衝撃が背骨を打ってやっと体は停止した。

「うう・・・」

うずくまって丸くなる。

痛い、痛い、と体中が悲鳴を上げるから、その狂いそうな感覚にいつそのこと気絶しなかった。

「××××××・・・×××・・・」

ふいに話し声が聞こえてきた。

低く、何語かも分からないような声が二、三人。

ー男だ。

ザッ、ザッ、と草むらをかき分けるような足音は徐々に近づいていた。

怖い、怖い、怖いよ。

何故こんなところにいるのか。

事件に巻き込まれた？それとも拉致？

いい想像なんて浮かびもしない。

そしてこれから私はどうなるか。

考えると馬鹿みたいに涙が滲んだ。

悲劇のヒロインの涙なんて普段鼻で笑っているくせに、現実には
酷く弱虫だった。

暗転

ガタガタと生まれたての子鹿のように震えて立てない私を起き上がらせたのもやはり恐怖だった。

「×××××××っ！！」

ふいに聞こえた野太い大声。

目が眩んだのは、いきなり当てられた光のせい。

ランプを持った男たちは急斜面の上にいた。

全身を黒い布で覆い、顔さえ隠したその姿は余計に疑念をかきたてた。

ぞわりと鳥肌が立つ。

何をしている、私は見つけたのだ。

気づいた途端全力で走り出す。

突き刺すような痛みなんて恐怖はいともたやすく凌駕した。

男たちが坂を降り始めたのが分かった。

ランプの灯りの大きさがその距離を刻明に示す。

一寸先も見えない暗闇の中で何度もぶつかり、足がもつれそうになりながらも走れるだけ走った。

心臓が鋼のようにどくどくと波打って今にも破裂しそうだった。

「ーっ！！」

硬い岩石につまづいて呆気なく転ぶ。

体が傾く瞬間だけ全てがスローモーションで、これは何かの悪い夢なんだとかなんとか考えた。

転んだ後の展開は早かった。

あつと言う間に男のひとりに両手首を掴まれ、体重をかけて地面に押し付けられる。

身動き一つ取れない状況で、もはや冷静さなんてかけらも持ち合わせちゃいなかった。

尽くせる限り叫んで、罵って、自分でも何を言っているかなんて分からなくて。

暴れるだけ暴れる私に、黒づくめの男がまたひとり歩み寄ってきた。

「×××××」

訳の分からない言語を話されたって理解できるはずもない。

ただわめき散らす私に、その男は顔に巻いていた布を外す。

後の二人がそれを止めたが、彼は気にしていないようだった。

ランプに照らされたのはそれはそれは美しい青年だった。

橙色の光の中でも分かる、銀髪の彼はとても人間離れしていて、場に似合わず魅入るのを禁じ得ない。

均整のとれた顔立ちに陶器のようなすべらかな肌、厳しそうな表情とは裏腹にややぱっちりとした瞳は愛らしい。

少年から大人への成長途中の危うさが、より一層美しさを際立たせる。

ああ、瞳の色はいつか透かし見たエメラルドの原石のようだ。

そんなことが分かるくらい顔を近づけられていることに気づいて、
ようやく我に帰った。

慌てて顔を背けても、壊れ物を扱うように手のひらで頬を包まれて
向かい合わそうとされれば、強く反抗は出来なかった。

再び見つめあうえば、青年はそっとーまるで怖がらせることのない
ようにゆっくりと顔を近づけて来た。

他の二人が息を呑むのが分かる。

私はと言えば何が起こるのかと体を強張らせて竦んでいるだけだった。
た。

ひとり、と合わさったのは互いの額。

触れるか触れないかの距離の鼻先に再び目眩がした。

その瞬間バクバク心臓が悲鳴をあげたのは恐怖からだけではなかった
かもしれない。

チカッと頭の中で火花が散った。

『共有します』

そんな声が私の中から聞こえて、細分化された言葉の羅列が次々と
入ってくる。

阻む余裕もなく粛々それを受け入れてれば、直ぐに真っ白だった視
界が元の暗闇に戻っていた。

青年は額をはなし、呆然と彼を見上げる私と目をかち合わせた。彼は口を開いた。

何故なんだか今度は意味が分かったが、問題はそこじゃなかった。

「お前は誰だ」

心底凍るような冷たい声は、弱った私にぐさりと、とどめに氷の刃を突き刺して。

傷だらけの体以上に痛む心を守るためか、それ以降意識はプツリと途切れた。

ユメ

わらえないの。

わらわないの。

わらってほしいの。

いたみをのりこえるにはわらうこともひつようだって。

じんせいはよろこびでみちあふれてるって。

こわがってなにもひろえない、きづけない、かわいそうなあのに
つたえてあげて。

わらうってすばらしいって。

何の夢をみたかは覚えていない。

ただひどく穏やかなその夢の名残りに、しばし浸って目を開けた。

――ここは？

痛む体をゆっくりと起こして、辺りを見回す。

白いひかり照らす、落ち着いた色調で統一された部屋だった。

ーうちのリビングと同じくらい。

そんな感想をもったこの部屋は、しかしおよそ人の暮らしを感じさせない無機質な部屋であった。

調度品も何もかもがそろっているのに、どこかと聞かれれば、この部屋自体使った形跡がないのだ。

綺麗なのにもったいない。

霞がかった思考でそんなことを考えた。

ちりんちりん

可愛らしい鈴の音色。

失礼します、と礼儀正しく入ってきたのは侍女のようであった。

「お目覚めですか？」

その言葉に私はこくと頷く。

そのやりとりがなんだかお嬢さまみたいになったようで気恥ずかしい。

このことをどう面白おかしくクラスのみんなに話そうかと気を紛らわした。

侍女さんは当然のように水の入った銀の深皿を私の膝の上に

置き、清潔そうなタオルを抱えて私のいるベッドの横で待機する。

ハープを浮かべた水盆をどうすればいいのかさっぱり分からない私は途方にくれて、頼りなさげに侍女さんを見るも、彼女は呟いた機

械のように微動だにしない。

「あっ、あの、これどうしたらいいんですか？」

おそろおそろ聞いた私に、侍女さんは急に顔をしかめた。

何か悪いことを言ってしまったのだろうかとあたふたしていると、侍女さんはいきなり顔を近づけて思い切り私に頭突きをかました。

共有

『共有します』

また頭の中でそんな声がしたかと思うと唐突に侵入してきた膨大な量の情報が津波となって思考をまるまる飲み込んだ。

「うあっ・・・！！」

思わず頭を抱える。

なに？ なんなのこれはっ！？

大量の語源情報が頭のなかを占領せんと群れとなってザワザワとうごめく。

ガタガタと体は震えを抑えきれず、眼球は世話しなく意思に反して小刻みに動くのを止められない。

やがて頭の中で恐ろしい異変が起こる。

押しのけるように日本語でなされていた思考を追い出し、新しい言語でとって変えられた途端それは収る。

「私に何をしたのっ！？」

カッとなって立ち上がった私は水盆がひっくり返ろうが気にならない。

ざばんと勢い良くぶちまけられた水が見るからに高価なカーペット

を水浸しにしてゆく。

それはじわり、じわり、とまるで浸食するように広がる。

私はといえば自分の口からでた言語に今度は顔から血の気がひいた。

何これ……日本語じゃない。
？

そしてハツとする。

変えられたのは口からでる言葉だけではない。
頭の中で飛び交う思考さえも違う言語にすり替わっていたのだ。

よみがえったのは昨日の記憶。
暗闇の中、追いかけて回され押さえつけられた恐怖。
そして気づかされた『リアル』。

「ああああああああああっ!!」

発狂だった。

痛い痛い、体中が痛い頭が痛い。

ここはどこ!?! あいつらはだれ!?!

閉鎖的空間に、東洋人とは明らかに違う顔の造りの女。
部屋じゅうの壁という壁が押し迫ってくるような圧力に、心臓が軋む。

死んじゃう。

こんなところにいたら死んじゃう。

恐怖に囚われた私の唯一の逃げ道は窓だった。

暗闇

脇目も振らず、白い窓枠に足をかけた。

恐ろしい女がすぐに私の腰をつかみにくる。

腹にぐっと食い込む爪、どれだけ強く足で蹴っても放そうとはしない女。

その細長い手はまるで昨日の、のっぺりとした闇に引きずり込もうとしているようで、溜まらず私は金切り声を上げた。

途端に部屋になだれ込んできた男たち。

甲冑に包まれた彼らの腰に添えられた剣を見て、それは確かに人殺しのための道具だと気づいた。

殺せるのだ彼は。

私の命など簡単に。

頭が真っ白になった。

だってこんなのありえない。

私の日常で人の命を奪おうとするなんて、こんなあからさまに、あの剣、だれかを貫くの？ 人殺し、おかしいよ、命って何よりも尊ばれるものじゃないの？

――これは一体だれの夢？

頭の中でパンツと何かが割れる音がした。
ストンと足の力が抜けて女にもたれかかる。

それは拒絶反応で、つまり私は考えることを止めてしまった。

一種の自己防衛というのだろう。

夜中に外で目覚めたこと。

男たちに追い回されたこと。

知らない他人の部屋で寝ていたということ。

頭突きによる言語の『共有』。

そして命の危機。

理解不可能なのだ。

どれひとつとっても、現代日本に生きる私の日常から、これらへの移行はそれこそどこでもドアのような魔法じみた機械でもない限り。

十七年間生きてきて、骨身にしみていることがある。

世界とは物悲しいほどに狂いがないのだ。

世の中には誰にも変えることのできない不変の法則が常に成り立ち、
いついかなる時もその神様が編んだ美しいレースに我々はほころび
すら見つけることができない。？

だからありえないのだ。

ほころびを超えた、こんな落とし穴の存在は。

私はゆっくりと闇に身をゆだねる。

私が罪人であるかのように、素早く頑丈な鎖のついた手枷をつけさせた兵士たちは女から受け取ったわたしの両脇をはさみ、腕を組ませる。

腕を組むなんて恋人みたいに聞こえるけど実際は逃亡を阻止するためか、血流が止まりそうなほどの力で掴んでいるだけ。

思考回路を蝕んだ闇は体の自由をも奪う。

されるがまま、私は護送する彼らに付き従った。

裁判劇

「ここに第72回ノーヴァンズ会議を開催する」

カーンカーンと年代物の銅鑼が開会を告げる。

まるで裁判だと思った。

うまく働かない頭は、それがつまり何を意味するところなのかに気づかない。

連れてこられたのは絢爛豪華な会議室だった。

ドーナツ型の机に、同じような紫の布で目以外を全て隠した人たちがちようど十二人座っている。

それに合わせて作られた円形の階段の一番下に私たちはいた。

？

額に装飾を施したはちまきをしている兵士が両脇に二人。

縛られた手からも歓迎されてないことがありと示されていたけど、私の虚ろな目はそれを映そうとはしない。

フード付きのマントー、チャドルのようなその真っ黒な服をうえから羽織わされた私は、まるで闇のなかからこの世界をのぞき見ているような気分だった。

それはつまらないときにつまらないテレビを見る感覚にとっても似ていて。

強制的に一切の感情を捨てたからっぽの心は、霧の中を彷徨う。

「本議会では第一継承権保持者ヴェルダンディ・ドウ・ハリファクス様の秘密裏に行われた王位継承の儀の妨害についての議論を始めた」

朗々と響く、初老の男の声。

蓄えられた白ヒゲは編み込まれ、先端を大きな紫水晶の飾りで止めてある。

彼もまた紫の衣をまもっていたが、額を残して目から下の顔を明らかにしていたのだ。

ああ、これは裁判か。

なんとなしにそう悟った。

無感情、故の冷静さは状況をありのまま受け入れ飲み込む。

始まって早々、十二人のうちの一人がスッと手を上げた。

「わたくしはかのものの断罪を望みますわ」？

紫の衣から現れたのは白魚のような手。

そしてそのままその滑らかで美しい手で頬杖をついて、青い瞳の女は目だけで妖艶に笑って見せる。

「『王家の墓』への侵入ですもの。それ位が妥当でしょう」

彼女の発言で静寂が訪れたのは一瞬。？

「では、かのものの刑はそれで決定とし、次に侵入経路についての・
・・・」

男はすぐに次の段階の話をはじめ。

私の処分はなんの話し合いもなく、あっさりと、実に事務的に決まったのだ。

事実、彼らにとって私の身の上など心底どうでもいいことなのだろう。

この人たちの淡々とした会話を聞くかぎり、その第一継承者と呼ばれる人の身さえ、表面上でこそ案じれど、こんな会議はやく終わればいいのになんて本心が透けてくるようだ。

「待ってください」

振りしぼった声は情けなくも震えていた。

ああ、何もしなければ殺される。

夢の中でだって死にたくない。

生きたい。

確かに私はそう願った。

命の価値

人の命の値段はいくらだろう？

道徳に沿って言えば。

いわく、命は地球より重く。

いわく、命は代わりがきかず。

いわく、命は天秤にかけられない。

しかし実際はどうだろう。

そんな命の価値なんて心底くだらなく、まったく無意味な理想価値でしかない。

ある本によれば人の命の値段はたった三千元なのだ。

そうわずか三千元ぽっち。

私のお小遣い以下。

それを守るのは薄っぺらいビニールシート。

押えていなければ、いともたやすく飛んでいくそれ。

今の私にはビニールシートを押えてくれる人なんているはずもなく、無防備にさらされた命はあつと言う間に刈られてしまう。

――そのなんと儚いことか。

「おい小娘、なんか言ったか？」

私のかすれた声が聞こえたのか、紫の十二人のうちがたいのいい男が声をかけてきた。

きゅっと、口元を強く結ぶ。

――誰も守ってなんてくれないよ。

はかれた弱音にそうだね、と同意する。

――だから、私が守らなくちゃ。

縛られた手を胸の前で握り締め、できるだけ落ち着こうと深く息を吸って、静かにはいた。
これは賭けだ。

「どうしたも、こうしたも、ありません。おかしいと思うから声をあげたのです」

紫の十二人全員がこちらを向く。
心臓がバクバク音を立てて軋み、脳からは大量のアドレナリンが分泌される。

「我ら最高評議委員の談義に不服を申すはなんと無礼なっ!!」

ガタリと紫の十二人のうち小柄な男が立ち上がって扇子をこちらに向け、どなる。

知らない大人の男の人に本気で怒鳴られるなんて想定外のことで、びくりと肩が跳ね上がる。？

出鼻をくじかれた気分だった。

すっかり黙り込んでしまった私に『紫の小柄』が忌々しそうにため息をついたところで、ひとときわ美しい声が耳に届いた。

「答えよ。娘」

冷たく、硬質、しかし芯のある年若い青年の声。

ざわりと鳥肌が立つその声の持ち主は、一番奥の席に腰掛けていますぐに気づいた。

――話しかけるならこの人だ、と。

かち合ったエメラルドグリーンの瞳は自分から放しはしない。

放してしまえば、疑われると思った。

「だって、よく分からない理由で人ひとりの命が消されるのはおかしいと思います」

そういつて不遜にも『紫の青年』を遠慮なく睨んだ。

他の紫の人が騒ぐのに気づいたけどどうでもよかった。

現実の命は軽くて安い。

百の一般人よりたった1人の権力者の方が価値があることもあるし、戦場では駒のように使い捨てられる。

そんなことは十七年も生きてきたら当たり前の常識で。

それでも私が私の命を諦めるなんてできるはずもなかった。

尊厳

「痴れ者がっ！『王家の墓』に侵入しておいて生きて帰すわけなからう！これだから賤民は厭らしいっ！！」

『小柄な紫』がいの一番にそう怒鳴った。

怖かったけど、そうも言ってられない。

一言、一言、言葉を発しながら自分に言い聞かせた。

「自分の命について意見することはそんなに悪いことですか」？

青年は口をつぐんだままだった。

何かを思案しているのか、それとも――。

と、そこで初めて『老年の紫』が発言した。

震えるような厳かな声は、明らかに半世紀以上を過ごしてきた者のそれである。

「しかし、レヴィオス公が申した通り、そなたは『王家の墓』にいた。・・・しかも王位継承の儀にだ。・・・私にはそれをとても・・・そうとても、偶然に思えない。むしろ、ヴェルダンディ様のお命を奪おうとしたと、考えるのが一般的なのだが・・・そなたはどう申し開きをいたすかね？」

――どうやら厄介なところに自分はいたらしい。

ひとつずつ明るみになる現状。

感慨にひたる暇はない。

「だからっていきなり証拠もなく死罪にするのは間違ってると思います。それにわたしは――」

申し開き・・・その言葉を思い出してわずかに惑う。

「わからない」なんて戯れ言、聞く耳を持つだろうか？

本当のことを心から言ったら、いつも信じてくれるわけじゃない。それが相手の常識や予想の範疇から出てしまっているなら尚更だ。それならいっそ、現実味のある嘘の方が・・・。

言葉に詰まった私を、エメラルドの瞳が射抜いた。

冷たいような悲しいような深い泉をたたえる瞳。

全てを、見透かされる気がした。

無理だ、この人を騙すなんて。
できない。

それは良心の呵責でもなんでもなくて、整然たる事実だった。
稀にいるのだ。

他人の嘘、真実に敏感な人間が。

ぞわりと、背すじをなでる悪寒に体がこわばった。

……どんな環境で育ってきたんだろう。

明らかに常人のそれでない視線に、私はついに嘯くのを諦めた。

結局、真っ向勝負。

「……何一つ分かりませんから、そんなの、答えようがないです」

あまりにもつたない言葉だった。

幼子の言い訳に私ですら聞こえた。

けれどどのみちあの『紫の青年』を欺けなくて、袋小路に追い詰められる。

「分からないだど!? 白々しいわっ! ふざけるなこの女狐っ!」?

「わ、私だってここはどこで、あなたたちは誰か、まったく見当もつかなくて困ってるだから!!」

そこで『小柄な紫』はフンと鼻を鳴らした。

「嘘を付くならもっとましな

嘘を付くことだな」

その言葉に私は脆くも崩れ去った。

全然、信じてくれない。

どうしよう、信じてくれなかったら、私、死ぬの？

すがりつくものがないこの状況で、私の精神はひどく弱っていて。恐怖はあつと言う間に全身を支配した。

「・・・あっ」

頭を震える指で抱えて座りこむ。

口の中が酷く乾いて、ひいひいと、上手に息ができない。
真っ暗な闇が私にまとわりついて離れない。

じんじんと痺れる思考回路はショート寸前。

人間なんて、きつと簡単におかしくなれる。

砂のお城みたいに崩れて、壊れて、もう元には戻らない。

叫び

その時、ついに緊張の糸が切れた。

「もうこんなの止めてよっ!!」

のけぞって張り裂けるほど叫んでいた。

ぐわんぐわんと、高い天井から跳ね返った声がやまびこのように何重にもなって返ってくる。

夢なら覚めてって何度も祈った。

うずくまって、耳をふさいで、目をつむる。

ひたいに当たる冷たい床。

傍から見れば、まるで神様に土下座して懇願しているように見えた。

「女、立て」

平淡な兵士の命令に私は立ち上がらない。

「女、立て」

再度の命令は実力行使をはらんでいて、私の肩を掴んで無理矢理立ち上がらせた。

このまま死にたくなんてない。
そんなの絶対に嫌だった。

ふりはらって、真っ赤な目で睨みつけた。

「私は認めない。私は信じない。お前たちなんて早く消えてしまえ。消えろっ！！今すぐ消えろよっ！！」

怒鳴れば、覚めるか。

その間にこのときの私は答えられなかった。

私はこんなに怒っているのだ。

だから、こんな状況を誰かがどうにかするのが当然だ。

そんな幼児同然の考えで、この悪夢から覚めると思っていた。

「姉上、あれはイカレたふりをしております」

『小柄な紫』はそう言った。

見下したその視線に体中が燃えるようだった。

姉上、と呼ばれたのはあの『紫の女性』。

初めに私に死刑を言い渡した例の女はぱちくりとまばたかせて兵士に目をやる。

「ーサディライ。『共有』を使いなさい」

「はっ」と一礼をとって、隣にいた兵士ーサディライがはちまきをほどこいてひたいをさらした。

なぜだかその姿が無防備に見えたのはわたしだけではあるまい。

そう思っている間にもサディライの顔が近づいてきて、逃げ腰の私を別の兵士が捕らえる。

例え一瞬でも見知らぬ人の顔が近くにあるなんて気持ち悪い。

全力で逃れようとする私に、『紫の青年』の冷ややかな声がかけられた。

「逃げようとするのはやはり、やましいことがあるのではないか」

疑われた？

私が殺人未遂を犯したと本気で思ったの？

なんで？と疑問符が頭の中を埋め尽くす。

――こんなの嘘だ。

甘ったれた私は心のどこかで、本当のことを言えば信じてくれるなんて夢を見ていたのだろうか。

ただ、「信じてもらえなかった」その事実だけが胸に突き刺さる。

私は愕然として、見開かれた目で『紫の青年』を写した。

その一瞬は永遠で、私の中の時が止まったようだった。

貫通（前書き）

前の文章を大幅に変更しました。

貫通

抵抗を止めた刹那に、セディライは頭突きをかました。脳みそが揺れる衝撃に意識がもうろうとしていると、セディライの顔が驚愕に歪むのが見えた。

「……………まさか」

押し殺すように呟かれたその一言は確かに夢ではない。しかしそんな彼の動揺もすぐに隠され、気を引き締めた表情に変わる。

その男はカツツ、カツツと、二回もかかとを鳴らして。

そして高らかに宣言したのだ。

「女の目的はヴェルダンディ様の殺害。詳しい侵入経路は防邪香により消されております故不明であります！」

目の前が真っ暗になった。

……………意味がわからない。

なぜこんな真っ赤な嘘をつかれなくてはならないのか。しかも殺害？

「……………ほう、やはりそのようですよ姉上」

『小柄な紫』が『紫の女性』に目配せする。

それはいかにも他人をおとしいれようとするそれで。

「ならば、証拠もそろいましたし。今決めてしましましょう。かの女に断罪を与えるのに賛成の方は赤札を。賛成でない方は緑の札を『審判の井戸』にお入れください」

麗しの女性がそう言って、手に持った赤札を投げた。

ゆっくりと、じらすように。

赤札はくるくると回って広いテーブルの真ん中にあけられたくぼみのなかに吸い込まれるように落ちていった。

カランカラン

やけに乾いた音が反響した。

それを皮切りに、次々と投げ込まれて行くのは全て赤札。

私はただ呆然とその光景を眺めた。

最後まで札を入れずに残ったのはあの『紫の青年』だけで、私は何を期待しているのか彼をじっと見ていた。

「……信じるの?」

ぽつりと、つぶやいていた。

「私の言葉は信じなくて、他人から聞いた私の本心は信じるの？」

責めていた。

彼を信じて、真実を言ったのに信じてくれなくて。

らしくもなく、傷ついたのかもしれない。

「たかが頭突きしただけじゃん。一体なにがそこからわかるっていうの？それは私からじかに聞いた言葉より信憑性があるっていうの？……ーあなたはっ！あなた自身が聞いた言葉を信じないで何を信じているっていうのよっ！？」

再び捕らえられた腕から逃れ用と私はもがいた。

だんだんと、怒気がつよまっていくなのが分かった。

「『共有』は全知全能の神、オーティスから受け継いだ神聖なるちから。間違いなど、あるはずもない」

青年が言ったのはそれだけだった。

そのことが私を真に激昂させた。

「ふざけんなっ！！そんなのはただの怠慢だっ！！自分が真実を見極めないでお前に何が正しいかなんて理解できるわけがないっ！！わたし、私はっ！お前自身に言ったんだ！」

怒りで我を忘れた私に、まわりは冷ややかな目しかむけない。

ふいに『小柄な紫』がこう言った。

「もはやはなせる状態ではないの。これ、王子の耳を汚させるな。連れて行け」

バツと、扇子が広げられヒラヒラと追いやるように兵士たちに指示した。

「軽んじるなっ！！私の命は私のものだっ！！！」

そして、そのままずると引きずられてゆく。

――最後の叫びは誰かに届いただろうか。

希望

いくら時がたったのか。

あのまま連れていかれた石造りの頑強な牢獄で私は膝を埋めて泣き通した。

もう『紫の青年』は赤札を放っているのだろうか。

……きつとそうに違いない。

やがて涙も出なくなって、することもなく狭く薄暗く不衛生な牢屋を見渡した。

全面が岩に囲まれてる。

明かりは廊下にあけられた横に長い、――もちろん人が行き来できる幅ではない、から入る蠟燭の光だけ。

ぴちゅん、ぴちゅんとした音にうつむいていた顔をあげる。

水が天井から滴って水たまりを作っていた。

誰かも涙を流しているのか。

重いからだを持ち上げて、のっそりと近づいた。

蠟燭の光でキラキラと黄金に煌めく水面。

覗き込んだ拍子に、波打ってくずれた。

あ、私だ。

写った黒い実像をみて、そんな当たり前のことを思った。

疲れ切った生氣のない顔。

虚ろな目は見開かれて、次の瞬間目じりが垂れた。

ほっぺを伸ばせば、カレーパン型の輪郭、横長くなった目に、広がった鼻。

「。。。変な顔」

笑いが漏れた。

それは弱々しくて、吹けば飛ぶようなものだったが、今はこれでもかった。

十分なことが分かったから。

「まだ、私・・・笑えてる」

まだ生きている。

体は痛むし、よく分からないところにいるし、なんか疎まれてるし、殺されるかもしれないし。

問題は山積みで、どうすればいいかなんて分からない。

――でも、まだ諦めるには早すぎる。

「ちちちちち」

なんの鳴き声かと思って下を向けば、どぶネズミが水たまりの水をすすっていた。

小さな鼻をひくひくしてヒゲを震わしていた彼は、私が気づいた途端駆け出した。

「まって！」

慌てて目で追いかけると、どぶネズミは壁の中へ消えていった。

暗くて見えないが、そこを手で探っていると岩の割れ目を見つけた。ひゅうひゅうと、指に感じるのは風。

――地下じゃ無かったのか！

どうやら外に続いているらしい。

重そうな岩。

そして雨音もしないのに水が垂れてきて、そしてこの上にもこんな風に重い岩の牢獄があるとしたら。

押し固められた硬い岩石に入ったヒビは少しの衝撃にも弱いと聞く。

――出られるかもしれない。

希望が持てたと同時にゴゴゴと地鳴りのような音がして、振り向けばドアには小柄な男が立っていた。

思惑

黒と紫の布をふんだんに使った豪華な服をまとった男は、額をターバンのような布で隠している。

おしやれに伸ばされたヒゲをいじりながら、男は扉を開けた屈強な兵士たちに席を外すよう命令した。

「まったく、あいかわらず汚いところだなあ。おお！鼻がひん曲がるようだ。私を向かわせるなど、姉上もお人が悪い」

声で分かった。

服装は違うが、この小柄な男はあの『小柄な紫』だ。

警戒を深めて睨んでいると、男はカッカと手に持っていた長剣で地面をついた。

「お前、死にたいか？」

「ふざけんな」

なんてことを聞いてくるかと思えば、男は思案顔でふむ、と頷いた。

「ならば、我らと協力しまいか？ならば、生かしてやることもできる」

なにを今更。

だいたい私を貶めたのはそちらではないか。

「そう睨むでない。死にたくはないのであろう？」

だからってそう簡単に男を信じることはできない。
皮肉をこめてつきはなす。

「理由はなんだ？お前らによれば、私は王子を暗殺しようとした女
だろ」

「利害の一致よ。こちらにも事情ができてな。お前の能力を姉上が
買われたのだ。なに、少し頼みごとを請け負ってくればよい。成
功したあかつきには一生遊んで暮らせるほどの財を与えよう。刑は
・・替え玉にでも、執行させてな」

こいつがいう頼みごとがいい事だとはとても思えなかった。

――私になにをやらせようとしている？

思い当たりはサディライが行なった『共有』。

そこで何かを見つけて――

・・・じゃあ、あの不自然なかかと鳴らしはこいつらへの合図だっ
たのか？

そう考えると納得がいった。

益々、きな臭い。

――脱出さえ出来れば・・・・・。

しかし、それは難しいことだった。

扉は開いているが抜け出した所で逃げ道なんて分からないし、待ち
構えている兵士を相手にすることなんてもっと出来ない。

「・・・という訳だ。しかし万が一という事もある。『共有』を行なってもよろしいかな？」

拒否権なんて無いくせに。

イライラしながら、ターバンをはずす男を見た。

そして気づいたのだ。

そうだ共有があるっ、と。

これほど簡単な事はないだろう。

この男の頭の中を覗き込んで脱出方法を知るだけでよいなんて。

しかし、自分に出来るかどうか不安もある。

傍目には頭突きをしているようにしか見えない『共有』だが、それこそ魔法じみた能力だったのなら、私にはもうお手上げだ。

ーでも、今はこれしかないから。

「・・・溺れる者はワラをも掴む」

なんて言うじゃない、そうぼそりと言い聞かせた。

私は溺れる者。

ならばとことんしがみつけるものには、しがみつこうではないか。

ギラリと私の瞳が、輝いたことに男は気づかない。

「何かあったか？・・・まあいい。おもてを上げろ」

男のひたいが無防備になった瞬間、私は思い切り頭突きをした。

展開

ゴツンっと、小気味いい衝突音。

『共有します』

その合図とともに視界がはじけて真っ白になったかと思うと、中心から目にも止まらぬ速さで色彩のビッグバンが起こった。

それはあつと言う間に私を飲み込んでしまう。

目の前に色とりどりの光が現れては流れ、現れては流れ、まるで濁流の中に身を投じたようだった。

――情報、脱出情報が欲しいっ！

祈るように念じて、鮮やかなきみどりの光を掴んだ。

ぶわあつと恒星のように光が溢れ出して視界が再び真っ白になったかと思うと、男の考えが直接脳に入ってくる。

リジスタ・ルナフィート・シャヴァール。

この賤しいガキを利用してやろう。

邪魔なヴェルダンディはそうそうに殺してしまう方が良い。

もしもこいつが手だれであっても、この魔剣なら……。

――これだっ！！

意識を現実に戻した私は、頭を抑えている男――リジスタから魔剣

を奪い取って鞘を抜いた。

見た目と違い、まるで私に合わせて作ったような軽さだった。磨かれた美しい刀身の切っ先をリジスタに向ける。

躊躇なんてしてはいられない。

「そこを動くな。騒いでも、殺す」

自分でも驚くぐらい険を含んだ声だった。

リジスタの怪訝な顔は、魔剣によって恐れに変わる。？

右手の魔剣は照準を合わせたまま、私は鞘を持った左手で思いきり岩壁のヒビをついた。

淡い光が鞘からあふれたかと思うと、ピキピキと壁に大きなヒビが入る。

――行けるっ！！

そしてそのまま、脆くなった壁に体当たりした。衝撃と壊れる感覚。

一瞬すぎて何がどうなっているか分からなかった。

ただ、まぶしい光が目に入って、開けた視界に、舞い立つ砂ぼこり、リジスタの仲間を呼ぶ声。

私は走り出した。

――
――
――

『ふざけんなっ！！そんなのはただの怠慢だっ！！自分が真実を見極めないでお前に何が正しいかなんて理解できるわけがないっ！！わたし、私はっ！お前自身に言ったんだ！』

ヴェルダンディは少女を思い出して、ため息をついた。

憂いを含んだエメラルドグリーンの冷たい瞳。

艶やかな銀色のショートカットの髪の間から見える、表情のない美しい顔。

人は彼を見れば口をそろえてこう言う。

まるで精巧なアンティークドールのようにだと。

そんな彼の手が止まっているのを見て、衛兵が声をかける。

「どーしましたあ？ヴェルダンディ様。まあ、貴方の考え事なんて

大方わかりますけどね」

さっきの女の子のことでしょう？と、続ける赤毛の衛兵。
へらっとした笑みを浮かべる優男であるが、若くして王族付き護衛にあたることができたかなりの実力者である。

「口を慎めテイル！！王子の御膳であるぞ」

咎めたのは黒髪の男。

いかにも厳格そうな男で、こちらもまた王族付き護衛である。

「またまたあ、レイリーはかったいんだからあ。だから、モテないんだよ。ねえ、おーじ？」

「黙れ！山猿っ！！」

同い年のテイルとレイリーはこうして火花を散らす。

若くして二人がこのような重役に付けたのには互いに切磋琢磨しあったからであるが――

――そのため協調性はない。

「そのへんにしとけ・・・テイル」

さらりと顔にかかる銀髪を払って、ヴェルダンディは資料に目を通し出す。

「うわお！否定しないってことは、ついにヴェルダンディ様め女の子に興味が！？まあ、恥ずかしがることないですよ。俺も王子くら

いの年頃には・・・」

「茶化すな山猿！」

怒鳴るレイリーに笑うティル。

ふと、思い出したように空を見上げたヴェルダンディだけが物憂げだった。

可能性

憎くらしいくらい今日も空は、青い。

ゆっくりとまぶたを閉じれば、まだ鮮明に思い出す。

あの怯えた態度からは豹変とも言えるほどの激情。

最後まで目をそらさずにヴェルダンディだけを、ただただ悲しみと
憤りの二色の炎を燃えたぎらせ、睨んでいた。

なんで信じてくれないの!?

と、聞こえる様だった心の悲痛な叫びは、彼を今もひたすらに責めている。

口にしたのは、折り混ざる彼の感情の渦の正体をはっきりさせたかったのかもしれない。

「――俺自身が聞いた言葉を信じなくて何を信じるのかと言われた……。俺は怠慢だと」

何も分からないと言った少女。

疑ってかかったときの、絶望した表情が、網膜にこびりついて離れない。

テイルとレイリーは口論を止めていつもは口数の少ない主人を見つめた。

「まるで俺が意思のないお飾りの『人形』だと言われてる気がした」

見目麗しきアンティークドール。

それは、政治空白が生んだ王族の権威の低下によるヴェルダンディの発言力のなさを揶揄するときにも使われた。

美しいだけのお飾り人形。

それを彼が甘んじるのは、下手に動けば城に巢食った蜘蛛が張り巡らせた糸に一度でもヴェルダンディがそれにかからば、あつと言う間に食らわれてしまうから。

「そんなことはっ！」

「あるだろレイリー。このままじゃハリファクス国はディアナ君女くんじょに本当に乗っ取られてしまう」

あるがまま赤裸々に語るテイルにレイリーは苛立ちを覚える。

「王が亡くなられた今、最後の砦は俺たちだけ。ヴェルダンディ様史上主義もいいけど、現状を見極めろレイリー」

「見極めた上で不遜だといっているのだ!!」

あわや本気の喧嘩に発展しようかというとき、ちりんちりとベルがなった。

「失礼します。お茶をお持ちしました」

侍女は紅茶をカップに注ぎながら、ひそめた声で本題の報告を行う。

「ディアナ君女が動きました。リジスタ様を牢へ向わせて、例の少

女に接触を持ちかけたようです」

チョコレートは好きですか、と聞いて侍女は切り取ったケーキを乗せる。

ながら作業など褒められたものではないが、これはお茶会に見せかけた報告なのでレイリーも口を挟まない。

「君は彼女の世話も頼んだな。その手の傷は彼女につけられたのか？」

ポットの蓋を押さえるときに見えた手の甲の三日月型の傷。

「はい。医師に診てもらいましたが毒物は仕掛けられてないのとことです。本当に状況が分からず混乱した上での行動に見えました」

だろーね、とテイルが相槌を打つ。

「あの夜の儀式のときも、暗殺者にしては間抜けな逃げ方だったし。あれは完璧に素人だよ。それこそ女の子の言う通り何にも分からない」

「だがしかしあいつは『王家の墓』にいた。侵入不可のあの場所にだ」

「それだけで決め付けるなんてそーけい。まったく誰かさんが押さえつけたりするもんだから怖がっちゃったんだよ」

静まる事務室。

湯気の上がる紅茶を口に含んで、香りを楽しむ。

「本当に何も分からなかった……か」

ヴェルダンディはひとり瞑想する。

そして再び刮目した時、彼はひとつの可能性にたどり着いた。

「命令だ。あの女をここに連れてこい」

物語は動き出す。

魔物

まるで体の一部にでもなったようだ。

しつくりと馴染んだ魔剣を見て、私はそんなことを思った。

月明かりに照らせば、銀色の刀身は淡い青や紫色がうつすら表面に浮き出る。

怪しいほどに美しい魔剣に少し薄ら寒さを感じたが、頼れるものはこれしかなかった。

生い茂る木々。

走れるだけ走って、もうこれ以上進めないところまで足を酷使し、たどり着いた森の中。

昨日のように怯えることはない。

落ち着いてみれば、月がずい分と夜道を照らしてくれた。

シャンっと、音を立てて魔剣を鞘にしまう。

大粒の宝石があしらわれている割に、簡素な造りのこの紗綾にはよく見ると不可解な文字がびっしり書かれてある。

それが封印の文字に見えて仕方が無い。

それくらいこの魔剣はそろ恐ろしい力を持っていた。

それを知ったのは牢屋を抜け出してそうそうだった。

とっさのことで準備ができていなかったといえ、そこは城塞。

すぐに数人の兵士が集まってきて、私に刃を向けた。

応戦できるわけもない私が威嚇のために抜いた魔剣は、私の意思に関係なく動き出した。

いや、魔剣の意思で私が動かされたといっても過言でない。

急に研ぎ澄まされた神経。

自分の手足でないように動き出す体は確かにわたしの身体能力を超えていた。

硬い硬い、鉄でできた甲冑がいつも簡単に碎けて粉々になる爽快感。走り出す両足の軽やかで速いこと。

あのなんとも言いがたい感覚は――例えばそう、体に乗っ取られるようなそれに似ていた。

じんじんと未だ痺れる右手と気だるい体が、それが確かに現実であると証明している。

「副作用かな……」

そうでなくとも今日という日は濃厚な一日であった。

朝から晩まで殺されるだの何だの、ストレスで胃に穴が飽きそうだ。

苔むした大木にもたれかかる。

夏場でも凍死するなんて言われてるだけあって、地面は湿って居た。しかし、幸が不幸かしつかりとした生地で厚みのあるチャドルが、体温が地面に吸い取られていくのを防いでくれた。

見上げた夜空は銀砂をまいた宝石箱。

その中心に収まるのは優しいお月さまで、その姿は地球と寸分も違いはない。

「負けない」

強く、強く、あらねばならない。

負けることが死に直結しているこの世界では、私は強くあらねばな

らない。

なんとしてでも、生き延びるために。

――本当は自分でも浅ましいと思う。

何もしないままに生を享受できていた私にとって、地を這うように生に執着している今の自分がとても愚かで、見苦しくて、恥ずかしかった。

そして、それでも、だからこそ、どうしようもなく私はこの身が可愛い。

薄暗闇の中で闘志に燃える両眼を見開いた。
黒曜石のそれは研ぎ澄まされた眼光を放つ。

生きてやる。

そんな決意がにじみでるようだった。

第二部 旅の終わりに

『命より重いものなんてあいにく持ち合わせちゃいない』

とかなんとか格好つけて言ってみたところで所詮文無し。

もちろん生まれてこの方サバイバルなんて経験したこともないから、山の幸の恩恵にもあずかれないうときた（だって、野草と毒草の見分け方なんて知るわけないし、さばかれていない魚なんて気持ち悪い、――というかそもそも獲れない）。

生っ粋の現代っ子の私は浄水器を通した水でさえ飲まないのに、どうして川の水なんて飲めよう。

いや、飲めない。

――結果、私こと一之瀬　？　柊（イチノセ　？ヒイラギ）はすっかり飢えていた。

一晩静かな環境で過ごしたせいかな、多少現実を直視し論理的な思考もできるようになったのだけれど。

だからといって、何かが変わるわけでもない。

おそらく今も追って来ている兵士を思えば神経はすり減る一方で、ただ今は人里につくことのみを目標に歩き続けているが、そこが必ずしも天国なんていえない。

尽きぬ恐怖に幻影の希望は、まるで飴と鞭。

――生きたい。

それだけが原動力。

山の中では人間の方向感覚は狂うとよく言うが、さっきから同じところをぐるぐる回っているだけの気がした。
のどが乾いて、ヒリヒリ痛みを伴う。

口の中はベタつくばかりでツバもでない。

「あーもーっ 果物ぐらいなんであってないのさっ!？」

どすん

重い腰を勢いよく下ろせば、ふわりと腐植土が出迎える。

ちょっと休もう。

はあ、とため息をついて魔剣を抱きしめる。

昼間でも薄暗い森の中、不安がないと言えば嘘だった。

ーーどうやったら帰れるんだろう？

ファンタジー小説なら小学生時代に読み漁ったけれど、私は運命の女神さまに会いに来たわけでもないし、ウサギを追いかけて穴に落ちたわけでもない。

まして、王様になれと天命がくだり妖魔に追われるまま異世界に渡りました、なんてくだりもない。

気がついたら、夜の森に放置されていた。

今思い出しても理不尽な自体に、眉間にシワがよる。

第一にこちらへ来た前後の記憶がないのがおかしい。
私はここに来る前、一体なにをしていた？

思い出すのはいつも通り笑いに包まれた教室。
それから――。

「おい、こっちだ」

はじめ自分が呼ばれたのかと思った。
慌てて見回すと、この茂みの向こうでぞろぞろと屈強な男たちが集
まって何かを探しているようだった。

昨日のデジャヴに、冷や汗が垂れる。

もう追いつかれたのかと思えば、そうでもないらしい。
城の兵士たちは鋼の鎧をまとい肩にはターコイズブルーの腕章をし
て、割りところざっぱりとした印象を受けたが、目の前のこいつらは
違う。

………なんと言うか、薄汚い。
体中アカだらけで、服もボロボロ、何日風呂に入らなかったらそう
なるんだとこちらが聞きたいくらい。
顔も手足も比喻でなく歪んでいて、まるで殴られたまま治療もせず
放置したままのようだった。
なにより衝撃をうけたのはその表情だ。

ニヤニヤと、いやらしい感情を隠しもせず潰れた顔で垂れ流している。

そこには、あまりにも理性が感じ取れなかった。

「ほんとにこっちで女の声を聞いたのかよ」

なるほど、その一言で全てを察してしまった。

つまり彼らの探し物とは私のことで、見つけて慰み者にでもしようとしているのだろう。

気づいた途端、衝撃に固まる。

ばれたら一貫の終わりだ。

息をひそめ、ギョツと魔剣を握り締めて震えが止まらない体でひたすら耐えた。

山賊

彼らは山賊だった。

それもおそらく底辺の。

茂みの隙間から見える男たちは、大柄でいびつで、薄暗い森の中がお似合いだった。

のそのそと辺りをくまなく探し出すその姿はトロールを彷彿させる。

『トロル、トロルド、トラウ、トゥロー』

邪悪な巨人、女子供をさらい、財宝を盗む。

大きくでかい鼻や耳。

鋭利な爪は男の腸を^{はらわた}引き裂くため。

彼らの住処は財宝でいっぱいになると光り輝く。

――そこに人影はいない。

そんな北欧のおとぎ話が頭をちらとよぎってよけいに恐怖は煽られた。

どくどくと体中を巡る血液の音が聞こえる。

今まで男になんて間違えられたこともない私を（現にあの裁判の時だって『娘』やら『女』呼ばわりされてたし）どうして飢えた男たちが見逃してくれよう。

薄く張った氷の上にいるようだった。

動けるはずもない私はできる限り縮こまって、ひたすらに時がすぎ

るのを待った。

はやくはやく諦めてくれますように。

そんな願いも虚しく、パキリと、近くで小枝を踏んずけた音がする。悲鳴を上げそうになった自分をどうにか抑えて、息を止める。

「仔猫ちゃん、どこでちゅかー。はやく出てこないとお、その首が折れちゃうよー？」

馬鹿にした猫なで声にゲラゲラとつづく下品な笑い。それじゃ楽しめないだのなんだの、本当に気分が悪かった。

「素直に出て来たら、お兄さんが優しくしてあげるからあ」

誰が『お兄さん』だ。

そんなんではいはい騙されるほど阿呆なわけない。

なかなか見つからない私に痺れを切らした男は背中にかかった薙刀なぎなたを取り出し、こう言った。

「出てこないならあ」

ザーザンツ

藪に切り込みが入る。

パラパラと木の葉が舞って、ざんばらに伸びていた木々が斜めに切りそろえられる。

「今度は首が飛んじやうかもね」

にたり、そんな卑下た笑いだった。

「おらよっ！」

ザンツザンツザンツ

悪寒が走る。

乱暴に藪へ分け入り男はどんどん薙刀を振るっては道を開き、こちらへ近づいて来た。

いやだ。

こっち来ないで。

枝を踏む足音に思わずむせ返る体臭。

来ないでよっ！！

そんな祈りが通じたのか、仲間の1人が鶴の一声を放った。

「おい、時間だ」

「・・・ちっ、これからがお楽しみなのに」

「もうすぐ来る。襲うなら薄汚れた野良猫より貴婦人の方がいい」

はいはいと、相槌を打って男たちが去って行く。

すっかり気配が無くなったのを確認して、ずるずると這って藪からでた。

腰が抜けて立てそうにもない。

・・・なんなんだ、次から次へと。

恐怖でしびれた体が、ずるりと崩れた。

荒い息とのたうつ心臓は、当分治まらなかった。

荷馬車

また奴らが来るかも知れないと気づいたら、行動は早かった。転がるように獣道ともつかない斜面を下り、追いかけられているような錯覚に執拗に後ろを振り返った。

やがて鬱蒼と茂るばかりだった景色に、光が差し込んできた。

駆け寄って草の根をかき分けると、そこは人の手が加わった道であった。

嬉しさの余り身を乗り出すと、朝露に濡れた草に持つ手が滑ってしまふ。

ふっと、嫌な浮遊感がしたと思ったら体に視界がぐるぐる回って、最後に半身に衝撃がきた。

「うっ」

そんなに高いところではなかったが、すりむいたかもしれない。頭を押さえながらようやく起き上がった所で、前方から軽快な足音が聞こえることに気づいた。

そして私は目を見開く。

ぱっかぱっかぱっか

だってそれは現代では廃れてしまった乗り物。

ぱっかぱっかぱっか

硬い蹄が舗装された道路を規則正しく打つ。

「どお、どお」

ヒヒーンと、四頭の馬がいなくて目の前で制止した。

その手綱は翁が握り、その後ろには木で作られた見れる程度に整った荷馬車が繋がれている。

思わず呆然としてしていると翁が話しかけてきた。

「何もんじゃない？」

いまわしげに私を見て、翁はふむ、と一人頷く。

「旦那さま、如何いたしましょうぞ」

そう言って翁はからりと開いたドアーからは、でっぷりと肥えた壮年の男が姿現すー、の指示を仰いだ。

興味本位か、ひょっこりと小さな子どもちらほら顔を覗かせた。

その中の奇妙な仮面をかぶっている人に、私はぞくりとした。

「黒の厭われ服・・・いや、なんでもないお嬢さん、ここで何をしているのかね？」

旦那さまと呼ばれていた太った男が、見定めるようにこう聞いて、

我に帰る。

この際なんでもよかった。

先ほどの山賊と比べてもまともそうな人たちに、救いを求めないわけがない。

「たっ助けて下さいっ!!」

気づけばそう叫んでいた。

視線

「――ほお、記憶がないのか」

こくりと頷く私は嘘がばれないかヒヤヒヤしていた（一昨日の記憶が少し抜けているからあながち嘘ではないかもしれないが）。魔剣はチャドルの下に隠している。

じろじろと、旦那さまの値踏みするような視線にひたすら耐えた。

「まあ、よろしい。困ったときはお互いさまだ。特に商人は助け合
あきんど
うのが鉄則！荷台で良いのなら置いてあげよう」

にっこりと笑う旦那さまにホッとして、ありがとうございますと頭を下げる。

懷に隠した剣が、優しい旦那さまをまだ疑っているようで少し罪悪
感にさいなまれた。

中に入ってみると、一見ひと続きの荷馬車はふた部屋に分かれていた。

ひとつは荷物を置いたための部屋ともうひとつは商人たち家族が過ごす空間だ。

私はもちろん荷物部屋にお世話になるのだが、意外にも先客がいた。

しかもひとりでない。

絨毯や織物がところ狭しと積まれている荷台のほんの少しの隙間に

五、六人が、思い思いに過ごしていた。
年齢も性別もバラバラで特にこれと言った特徴もない。
ただ、私を胡乱な目で見上げているということ以外。

その中に、仮面の男はいた。

――あ、さっきの。

ちりつと恐怖心がうずく。

白い歪んだ形の仮面は左右で大きさの違う目と不自然な形の鼻が載って居て、黄色や赤の模様がペイントされている。

口だけがあらわになったその姿は、まるでピエロのなり損ないだった。

出口の所で立ち止まる私を、従者のおじいさんは押し込んでドアを閉めた。

光は天井に張られた板から漏れる少しだけで、中は仄暗い。

ガタガタと揺れ出す荷馬車。

居心地の悪さで、なかなか座れないでいると例の仮面が手招きをした。

「こちらへおかけになりますか？」

似つかわしくないほど穏やかな声だった。

仮面は座っている位置をずらして隣にスペースを作って、ぽんぽんとホコリを叩いてくれる。

おずおずと歩みを進めると、やはり刺す様な目で周りから見られた。

急ぎ足で仮面の隣に座る。

「僕はピエロットです。レディの名を教えていただけますか？」

一瞬ためらう。

けれどこんな丁寧に言われては答えないわけにはいかなかった。

「・・・一之瀬？ 柊」

ぼそり、そうつぶやくとピエロットは仮面の下で目を見開いた。

「イーティアノーセっ!？」

・・・誰だよそれ。

一之瀬をもじったような名前に顔をしかめた。

もしかしたら発音しにくいのかも知らない。

「違います。ヒイラギです」

訂正すると、目に見えてピエロットは落ち着きを取り戻した。

ああ、そんなわけないですね。すみません勘違いです、と栗色の髪を照れくさそうにかく。

「レディ・ヒイラギは・・・何だか僕の知っている人にあんまりにもそっくりだったんで・・・お恥ずかしい限りです」

白々しいと思った。

仮面で表情が分からないから、言葉ではそう言っているても、本心はどうなんだか。

だいたいこの部屋の空気が嫌いだ。

先ほどから私とピエロットの動向をぶしつけなまでに見て来る他人に、苛立ちは隠せない。

なんなんだここは。

仮面をつけた青年が珍しいのは分かるが、私はどうだ？

ここの住人とはそんなにはっきりとした違いがあるのだろうか。

襲撃

いぶかしんでいるとピエロットが、旅行鞆からベージュのカーディガンを出して寄こして来た。

「良かったら使ってくださいませんか？」

いまの季節にそれだけじゃあ寒いでしょう、と私の肩にそっとかける。

その時に彼の肘がチャドルの中の魔剣に当たってカツンと音になる。

「ー気づかれたか？」

ひやり、と冷や汗が流れて、見極めようとピエロットの目をじっと見た。

すると彼はまた恥ずかしそうに頭をかく。

「ああ、なんで僕みたいなのが女物の服を持っているかと言いますとね・・・ちよっ！そんな目で見ないでください。別に女装の趣味とかはないですよ」

じっと見つめたのを、違う意味に受け取ったらしい。

どうやら、魔剣には気づかれていないようだ。

ほっと胸を撫で下ろしつつ、あらためてピエロットを観察した。

優しい声色、この牛や小屋のような物置には似つかわしくない洗練された服装。

物腰も柔らかかで、だからこそ先ほどの山賊を見た後でも隣に座るこ

とを私は曲がりなりに良しとしたのだろう。

仮面を除けば、かれはしごくまともだった。

しかし、それさえも仮面の不気味さを引き立てる要素にしか感じられない。

そんな風に思われているなんてつゆ知らず、ピエロットは楽しそうにカーディガンを持って来た訳を話し出した。

「女の子で・・・そう、ヒーラギさんより少し歳下の僕のご主人がおりましてね。ええ、そうです。

僕と彼女は従者に近い関係なのですが、彼女が訳あって家出してしましましてね。

一緒に出ちゃうと、僕が誘拐犯にも思われかねませんから、時期をずらして家を出て、これから行くハッシュ街で落ち合うんです。

彼女、年の割にちっちゃくて荷物もあんまり持っていないようだったから、こっそり持ち出して来ちゃいました。

ほら、女の子は物入りでしょう？

年ごろなのに着飾ることもしない子なんで、僕があつたら絶対に可愛らしい服を着せて、髪を結って、そしたらつめも磨いて、世界一可愛らしいご主人にしたいですね」

こっそりとまるで宝物でも見せるようにピエロットは旅行鞆の中を私に見せる。

桃色のフリルのついたスカートに、真っ黒なリボンが印象的なシャツ、千鳥柄のコルセットに可愛らしい日よけ帽子。

その女の子とはずいぶんなお嬢さまだったらしい。

「・・・駆け落ちなの？」

この仮面男と添い遂げたい女がいるとは考えられにくいが、話を聞くかぎりではそうともとれない。
そう問えば、しかしピエロットはにこやかに（笑っているのは仮面だが）それを否定した。

「いえ、決してそのようなことはありません。あくまで従者として主人を慕っておりますから――」

ガタンッ

急に横揺れしたかと思うと、それまで順調に走っていた荷馬車が止まった。

あまりの衝撃に積み上げられていた荷物がどさどさと頭の上に落ちて来る。

「旦那さまっ！！賊が出おりましたっ」

「なんだとっ!？」

切羽詰まった翁と旦那さまの声。

いうことを聞かなくなった馬のいななき。

聞き覚えのある、――下衆な笑い。

体がこわばるのがわかる。

まるで運命からは逃れられないとでもいうように。
いつまで追いかけてくるのだろうか。

それはさっきの山賊だった。

大人

悲鳴はあつと言う間に伝染した。

板越しに聞こえて来る喧騒に慌てふためく荷馬車の乗客は我先にと扉に向かう。

あまりのことに呆然としてしているとピエロットが私の手を引いた。

「ヒーラギさん！」

「・・・あ、うん」

出たって待っているのは地獄だった。

山賊はそれぞれの武器を手に乗客を追い回し、一人残らず捕まえているようだった。

一番初めに脱出した男はすでに死んだも同然だった。

喉を深く切り裂かれて、ひゅーひゅーと虫の息で横たわっている。

同じく逃げ出したみすばらしい女は髪を鷲掴まれ、痛みに歪むその顔を舐めとられていた。

山賊の歪んだ顔に浮かぶ恍惚にみちた表情。

何をしようとしているのかぐらいは認識できた。

理解はしていない。

旦那さまは満身創痍の翁を盾に、何とかしろと喚いている。

後ろで旦那さまの奥さまと思しき人が組み敷かれていることに気づいているのだろうか。

「荷だぁ！荷だぁ！若い女もいるぞおっ！！」

入り口で突っ立っていた私たちもすぐに見つかり、抵抗する間もなく壁に押さえつけられた。

ささくれ立ったベニヤ板に頬を打ち付けながら、うなじに生暖かい息を感じる。

肌が粟立った。

――醜い。

悲しかった。

大人ってもっと素敵なものだと思ってたから？

人は誰しも完璧ではなくて、欠点を抱え生きている。

子どもは横暴で無神経、無知ゆえに残虐。

そんな愚かさを人は年をとるごとに、人と関わり影響され、傷つけ合って痛みを知り、賢さに変えていくのだと思っていた。

年を取れば取るほどより人間は人に近くなっていく、そんな風に。

ーしかし、実際はどうだ？

この阿鼻叫喚の地獄絵図に描かれた人間はケモノ以下。

こいつらは、自分の時間を浪費しているだけじゃないか。

そんなのー

「離せっ!!」

声を張り上げて、魔剣を鞘から抜いた。

押さえつけていた山賊と距離をとって、震えて焦点の定まらない切っ先を彼の心臓に向ける。

「怯えてるの？こねこちゃあん」

にたり、と笑われて脅しにもなっていないことに気づいた。

馬鹿にされているのだ。

剣もろくに扱ったことのない小娘を、ただの捕食対象として。

「お前は何のために生きているっ!？」

絞り出した声に山賊は声を立ててあざ笑った。

「おかしい奴だなあ。楽しいからに決まってるだろ!？奪う!浚う!壊す!さいこーだ!」

イカレてる。

そんな奴がのうのうと生きているのに、なんで私は殺されそうになったんだ。

『紫の青年』の姿がチリと浮かぶ。

だって、こんなにあんまりにも理不尽だ。

ねえ、神さま。

そんな理由で生きている他人がいるなら、それよりもっと高尚に生きてる私はその他人を切り捨てても生きていていいよね。
だからこんな剣、持たせたんでしょう？

真っ白だった刀身が幕を張った様に紫色に輝き出す。

すうっと、運動神経をのつとられるこの感覚に疼きが止まらない。

「魔剣？ いいもんもってんじゃん。こねこちゃあんもそれも全部おれのもの」

その時、仲間の山賊が目を見開いた。

「止めろ！！そいつは呪われた魔剣ノルン・・・」

彼が言い終わる前に、目の前の山賊の肘から下が吹き飛んだ。
明い血潮がぶちまける。

ジャック

生きたい。
生きたい。
生きたい。

その願いのためならなんでもできる気がした。
その願いの前なら道徳もなにも消え失せる。
むしろ道徳がないことが道徳といっていい。

肥大化した恐怖心はついに自らを追いついて、刃を向く。
そうだ。
逃げられないのなら、いつそ追いかけられないよう殺してしまえばいい。

魔剣に埋め込まれた宝石は、血を吸った様に紅く染まった。

「畜生っ！！やりあがったな！」

仲間の惨事に1人の山賊が短剣を振りかざして襲いかかる。
怒りまかせの単調な動きは魔剣に全てをゆだねた私にはかわすまでもない。

不用心な懷に飛び込んで男の太ももを串刺す。
ずぶり、と刀身が肉にのめり込めば、苦痛のあまり男は雄叫びを上げる。

続けざまにわき腹に蹴りをいれれば男は容易に転がった。

その頭を踏み付け喉元に刃を近づければ、「うおーっ」と背後で新
手の山賊が槍を突き刺そうと迫っている。

ぶわり

その瞬間、魔剣が紫赤色の？をまとう。

大気がゆらぎ、燃えるように熱くなった。

ひと振りすれば、剣圧が山賊を突き飛ばしていた。

バキバキと林の木々を散らしながら、男は沈んでいく。

なるようになれば良い。

こいつらが死のうが私には関係がないのだから。

黒く澱んだ瞳で辺りを見回せば、すでに山賊は略奪を辞めていた。
皆が皆、信じられないような面持ちでこちらを見ている。

「撤収だ！お前ら、撤収しろっ！！」

お頭と思われる男が、そう叫んだ。

蜘蛛を散らすように林へ逃げ込む彼ら。

間合いを詰めるのは一瞬。

跳躍したさきには逃げようとしていたお頭。
彼が動かないのは私が突きつけた魔剣のせい。

傍目にも分かるほどお頭は冷や汗を流して、口元だけをなんとか笑わせていた。

「・・・呪われた時の魔剣『ノルン』か。じょーちゃん、悪いことは言わねえ。それは捨てちまいな。『征する指環』がなけりやそいつはじきに主人を喰う」

「捨てるさ、でも今はその時じゃない」？

研ぎ澄まされた、湖畔のように滑らかな刀身を魔剣――ノルンは晒してお頭に突き出される。

先端は彼の頭部をなぞって首筋へ向かい、心臓で止まった。

はあはあと、お頭の息が荒い。

脂汗と震える彼の体は止め用がない。

故に優しく囁く。

「貴方を斬ればすべて終わる？」

にっこりと笑えば、お頭は絶望の表情で私を見上げた。

ティルディナック

「いたぞっ!! あっちだ!」

誰かの応援を呼ぶ声。

意識をそちらに向けた隙にお頭は転びそうな勢いで逃げられた。

一瞬、山賊はあれで全員じゃなかったのか、そう思ったが違ったようだ。

どこかと馬にまたがり、砂塵を舞いあげかけて来たのは、ターコイズブルーの腕章をつけた兵士。

城の奴らだった。

どちらかと言うと数は多くない。

しかし身のこなしは、山賊のそれとは月とスッポン。

素人目にも分かる鍛え抜かれた体だった。

――もう追いついて来たのか。

じりりと、背中がやけるような焦燥感。

今すぐにでも尻尾を舞いて逃げ出したいが、背中を見せればすぐに矢が体を貫くに決まってる。

タイミングを見計らうべき、もしくはこの兵士たちの指揮官でも人質にとってしまったおうか。

そんなことを考えていた時、兵士の人垣から、すらりとした男が現れた。

「やれやれ、何やら魔力の気配がして来てみれば・・・時の魔剣ですか。レディ、んな大物もってりゃ暗殺者だのなんだの言われたっ

て仕方がないよ。今すぐ手放して投降しなさい」

少したれ目のひとなっこそうな顔立ち、栗色の毛にゆるゆるとした
雰囲気の青年だった。

ふざけたような態度とは裏腹に、他の兵士よりも上等な甲冑をまと
っている。

彼はその甘やかな見た目を裏切るほどに戦なれしているようだった。

――あなどれない。

「私に濡れ衣を黙って被る道理はない。去れ」

威嚇するような声がでた。

皆が時の魔剣と恐れるノルンを突き出して彼を差した。

脅しぐらいにはなるのかと思ったが、男は相変わらずひょうひょう
とする。

「うーん、やっぱり女の子はいいね。こちらら部下も男、上司も男、
むさ苦しいったらありゃしない。俺はティルね。ティルディナック・
マーククレインが本名だけど、君にはティルって呼んでほしいなあ。
ところで可愛らしいレディの名前をうかがってもいい？」

小首をかしげるさまはまるで私を捕まえに来たようには見えなかつ
た。

「道化が、小賢しい真似を。優しく扱えば私が簡単に騙されると思
ったか？」

「あららのら、一晩でずい分変わっちゃったね。俺は昨日の小動物みたいな君も好きだったけど、今のも好きかも。うーん、ヤバい惚れちゃってもいい?」

黙れ!と叫びたいのをぐっと我慢した。

相手のペースに乗ればそこでお終い。

昨日の牢屋に逆戻りだ。

それよりはー

「『時の魔剣ノルン』とはなんだ?」

ティルは面食らった顔をして、それからへにやりとまゆを垂れた。

「俺の愛の告白は総無視なのね。まあ悲しいけどいいよ。ノルンについて教えてあげる。……だけど、世の中ギブアンドテイクだよね?」

キラリと、ティルの目の奥が光ってぞくりとする。
生唾を飲み込んで、睨む。

「何が望みだ?」

「君とディア……いや、リジスタ様との関係さ」

「関係も何もお前たちが差し向けたのだろう!」

お門違いもいいとこだ。

いらいらしながらティルをみると、彼は見るからに思案顔になった。

「答えたぞ。次はお前の番だ」

「ちゃっかりしてるねえ。それとあれかな？敵には口が悪くなるタイプ？ああ、ごめんよ。そんな睨まないでくれ。ノルン、ノルンについてだったね、その剣は
――王殺しの剣だよ」

『王殺し』？

またやっかいなワードがでてきた。
顔をしかめていると、テイルは楽しそうに笑う。

「ノルン――別名『時の魔剣』、そうだね、彼女も君のように黒髪だった。黒髪の得体のしれない姫が帯刀した悪魔の剣、時の王を2人も殺した史上稀にみる悪性兵器。例えばそう、君のような女の子でも達人の域にしてしまう力をもった、ね。おう、切れ味も最高のようだ」

転がった山賊の腕に、テイルは満足そうに頷いた。

交渉

「で、どうして君がそんな物騒な物をもってるんだい？それは国庫に嚴重に保管されている物なんだけど」

まただ。

疑われている。

自分の上司のリジスタにでも聞けばいいだろうに。
なぜだ？

「うん、答えたくないか。それとも、答えられないか……。君さ、ほんとーにヴェルダンディ様を手にかけてようとなんてしなかったの？」

「くどい。言っただけだ」

その言葉を聞き、ニコツと、とろけるような笑顔を見せて、テイルは颯爽と馬から降りてこちらに近づいてきた。
来るな！と剣を振り回そうにも後ろに控えた兵士たちが弓を構えるのを見れば、迂闊な行動はできない。

「ねえ、手を組まない？」

すっと差し出された手を見て、私は啞然とした。
見上げたテイルは相変わらず笑っている。

「……………何をいつている？」

「ディアナ君女がレディに目をつけた。あのノーヴァンズ会議でサ
ディライが君との『共有』できっと何かを見つけたからだ。それも
あの悪魔の有益になるような何かー、そら恐ろしいね。俺たちの
最後の砦のヴェルダンディ様がまた命の危機にさらされるなんて」

ティルは私を説得しているようだった。？

優しい笑顔と、切望するハチミツ色の瞳、自らの魅力を分かった
上での行動だ。

しかし、リジスタはそのヴェルダンディを殺そうとしていたはずだ。
その手下のティルはヴェルダンディを助けたいだと？

おかしい。

何かが矛盾している。

そんな思案にふける私の様子をどうとったのかは分からないが、テ
イルは焦れていた。

どこかしら、このやりとりをまどろっこしがつているのだ。
まるで早く結論を急ぎたいとばかりに。

「君がノーヴァンズ会議で一心に語りかけていた人がいるでしょ？
あの人がヴェルダンディ様」

ハッとして目を見開く。

あの、『紫の青年』。

彼がー

「ヴェル、ダン、ディ……」

突然、意識がクリアになって、胃の中が真っ赤に燃え上がる。

そんな私の変化に、ティルは愉快そうに唇を歪めた。
まるで魚がかかったとでも言いたげ。

そこからはまくしあげるようにこう続ける。

「そう、君があ夜に『王家の墓』で会った人。そのヴェルダンディ様の命を救えるのは君だけなんだ。君しかない。お願いだよ。一緒に城にきてくれないかなあ？大丈夫、城では君を粗暴になんて扱わないし、ヴェルダンディ様も君をちゃんと気にかけてくれる。こんなに傷だらけになって……外は生きにくいだろう？」

甘い誘惑だった。

詰まるところティルは言外に、私を安全なところに匿うといっているのだ。

さらにはヴェルダンディに恩を売っておけば、見初められる可能性まで示唆しているのである。

「俺たちを信じて、レディ」

駄目押しとばかりにそう囁いた。

おそらく彼の頭の中ではヴェルダンディの見目麗しさに惹かれた女が一秒後に迷わずうなずくという予想が立てられているのだらう。

胸くそ悪い。

「――都合良すぎんだよ」

突き放した私の言葉に、テイルは驚いたようだ。
まさかそんな返答をされるなど、心にもないと言う様子で。

「あいつがヴェルダンディなら尚更だ。あの時私を信じなかったくせに、今度は信じて助けるだろ？ たいがいにしろ。寝言は寝て言え」

駆け引き

手のひらを返されるのは嫌いだ。

お前は馬鹿にされていることも気づいていないのだろうと、見下されているようで。

そのくせ、表面上はいやに友好的なのだから余計に甚だしい。

「……んー、じゃあ俺が君を信じるよ。これじゃダメ？」

あまりの軽々しさに反吐が出る。

ニコツと小首をかしげるテイルに憎悪が湧いた。

信じるなんて口先だけのくせに、私が気づかないとも思っているのか。

ますます腹が立った。

話し合いの余地はない。

しかし、ノーと言わせないこの空気に辟易した。

もういい。

ヴェルダンディを殺す助けるに関わらず、こいつはそういう点でリジスタと同じ人種だ。

逃げだしてすぐに捕まってたまるもんか。

どうやってこの場を切り抜けようかだけを考える。

「『共有』は全知全能の神オーティスから受け継いだ神聖なるちらー」

ふと、そのフレーズを思い出した。

わかる限り『共有』は、言語から始まり記憶、はては思考までも他人と共有することができる。

そこがメリットであり、デメリットだ。

額と額とをぶつけるだけで人と人との考えを理解できる。

それは言い換えれば、秘密を持つことができないのだ。

だから、兵士や高い身分のものは額を一樣に隠していたのだろう。もしこの予測が正しければ、

ーー使える。

苛立ちを隠し、極めて平静を装ってテイルを真正面から見据えた。

「信用して欲しいなら、『共有』させてよ」

いくぶんか口調が柔らかくして、そう問うとテイルは大袈裟に良かったあーと、息をついた。

「それだけで済むんならお安い語用ですよレディ」

にこにこと笑うテイルは目だけが剣呑な光を宿していることに気づいていない。

ふん、やはり『共有』されてはいけない秘密を隠しているらしい。

額をつきあわせる前に近づいた私に剣でも抜いて確保、ってところか。

それでいい。

私も愚かな娘を演じてやろう。

「少しでもやましい考えがあれば、私はあなた協力しないから」

そう睨みをきかし、警戒する素振りを見せる。

「やましいっ！？信用ないなあ……。言っとくけど俺ってば好きな人には純情になっちゃうタイプよ？」

そう軽愚痴をたたきながらテイルは帽子の金具を外して、地面に置いた。

「そっちのやましいじゃない。頭、届かないから。しゃがんで」

いうとおりにしゃがんだテイルにゆつくりと歩みよる。

タイミングを見誤ればそこでゲームオーバー。

最後の最後まで、警戒を緩めない娘のふりをしなくてはならない。

ノルン、後は頼んだから。

人質

テイルまであと半歩、と言うところで私は立ち止まる。

見つめあう優しげな面差し of 剣士と、黒髪の少女。

場面が違えばロマンチックにでもなったかもしれない。

そんな考えが過ぎったことに嘲笑する。

そんな所詮『たられば』を、昨日散々考えた。

これが夢だったら、彼が信じてくれれば。

想像が出尽くしたところで虚しくなつて気づいた。

それこそが今において夢物語りなのだと。

意を決し、ためらうような仕草を見せ、意を決したようにテイルに頭突くフリをした。

――攻防はまさに刹那であつた。

額が迫ろうとした瞬間に、ついにテイルは剣を抜く。

予想どおりの裏切りには身も蓋もない。

真に驚いたのはあまりにも素早い動作。

内心ひやりとしたが、そこはノルンが上手くやってくれた。

ぶわりとまたノルンの刀身を紫赤色の炎が^{ほむら}つつんだそれでテイルの剣を打ち、叩き落とした。

キイイイイン

鉄の塊はそう悲鳴を上げ、ゴンっとその重い体を地面に横たえた。鍛え抜かれた剣士が命とも言える剣を落としてしまうとは、ノルンのちからは計り知れない。

驚愕に染まるテイルに攻め入る隙は渡さない。

片足で踏み込み、助走もないままに跳躍する。

それはあまりに一瞬の出来事で彼の視界は真上にいる私を捉えられなかった。

気づいたとしても時すでに遅し。

スタン、とテイルの背後に着地した私は素早く彼の首に刃をあてた。ざわりと兵士たちに動揺が広がる。

「動くな。さもなくば刎ねる」

短くそう牽制すると、兵士は悔しさに唇を噛んで、構えていた弓をしぶしぶ下ろした。

テイルを立ち上がらせ雑木林にそろりそろりと向わせる。

「・・・まさかレディに負ける日が来るなんて。女性のことは分かった気になってはいけないね」

緊張状態においても軽愚痴をたたくテイルの喉元にノルンを強く押し当てた。

「喋るな、討つぞ。お前らもついて来るな。こいつの命が惜しくば

な」

歩け、そう命令してティルと私は雑木林入って行く。？
気は抜かずに兵士から目は離さないように後退して行く。
彼らに私たちを止めるすべなど残されていない。

次第に兵士たちは木々に隠されて見えなくなっていくた。

裏切りと偽り

「あーあ、騙されちゃった」

さつきからよく喋る奴だ。

喉元にノルンを突きつけているはずなのに、このテイルとかいう長身の男の態度は変わらない。

依然としてマイペース。

そして隙あらば口説いてくる。

「ねえ、いい加減名前くらい教えてよ」

「・・・もしかして仲間に居場所を知らせるために話しているのか？」

ふと思いついた彼の奇行の理由をただしても、のらりくらりとかわされる。

「ないない。あいつら筋肉馬鹿ばっかだし」

あはは、と笑うテイルは先ほど私を裏切ったことなどすっかり忘れてるように振舞う。

その変わり身の早さに、正直嫌悪よりも不気味さを感じた。

「ああ、そう言えばなんで君は俺が約束を破って、剣を向けてくるまで攻撃をしなかったんだと思う？」

逆に聞かれた。

歩みは止めない。
でも少し目をいからせた。

「お前を信じたからだ。あいにく裏切られたが・・・そういうことだ。二度と信用など戯れ言を交渉の場に持ってくるな」

持ってくる権利がないのは裏切り者のお前が一番分かっているだろうと、目で語った。

「本当にそうかな？」

予想外だった。

「なにが言いたい」

「攻撃をしなかったのは俺が君を裏切るのを待っていた・・・からじゃないの」

カッとした。

剣の柄でテイルの腹を打ち、体重をかけて、彼の体を倒す。
馬乗りになって、剣を思いきり振り下ろした。

ザンッ

草が舞った。

「ふざけるなっ！お前にそんなこと言われる筋合いなんてない！！」
自分から騙しておいて、まるでわたしの方が悪の根源のように言わ

れなくてはならないんだ。
訳がわからない。

煌めく刀身はティルの顔のすぐ横の地面に深く突き刺さっている。
彼の柔らかな亜麻色の髪を一房切っていた。

憤怒した漆黒が、ティルのハチミツ色の瞳にまるで異質物のように
映る。

その私に向ける表情は、哀れみだった。

「今さら分かったよ。レディ、君がただの一般人だってね。・・・
君はただ、理由付けが欲しかったんだ。君が切り落とした山賊の腕
のように、これから生きるためにする裏切り、殺し。なんの大義も
なくそれらを行うなんて正常な奴らにはできっこない。分かるかい
？君は自分を正統化しているんだ」

「・・・うるさい」

「信じてても裏切られた。だから自分がやっていることに間違いはな
い。だって正当防衛だから、そう自分に言い聞かせて」

「うるさいうるさいうるさいっ！！黙れよお前っ！！」
？

なにを分かったようなことを。

こいつに私の何たるかなどわかるはずもないのに！

「・・・お前じゃなくてティルだよ」

地面に刺さっていたノルンを抜いて、激情のままにティルに切りか
かった。

胸から腹にかけての一太刀。

ざくり、と不器用に肉を断ったのはノルンではなく私の意思だった。

飛沫が顔や体に赤いまだら模様を作って、ゆっくりと滴る。

裂けた傷口からじわりと真っ赤な血が溢れだして、血の池を作った。

何故なんだろう。

むせ返る鉄の匂いに吐きそうだ。

「・・・殺さないの？」

ゴフツと彼の口から血が溢れて咳き込んだ。

それでもなお穏やかな口調に、頭が冷える。

殺すもなにもほっておけば勝手に死ぬだろう。

私の汚点を始末することに関して私は恐ろしいまでに残忍だった。

「殺せば奴らの足を止める物がなくなる」

スツと立ち上がって見下ろした。

彼からすれば物を見るような目だったと思う。

死んでいなければ処置や輸送が必要になる。

この男を見捨てるような部下もないだろう。

血のついたノルンを鞘にしまって、私は走り出した。

また何かから逃げるように。

歌

小川のせせらぎと、山中にぽつんとできた陽だまり。

白い手のひらについた、まだあたらしい血のあと。

それはこの穏やかな風景と対比されて、より鮮明に浮かび上がる。
見ていると口の中に酸っぱいものが溢れてきて、吐き気が抑えられ
なかった。

「・・・っ、うえ」

からっぽの胃は逆さまになったようによじれて、胃液だけを散らか
す。

もうやぶれかぶれだった。

痛いんだか、苦しいんだか、辛いんだか。

バケツをひっくり返したようにぶちまけた感情は器に入っていたこ
ろを自分でも思い出せない。

やっと治まれば、震える体をし必死に抱きしめる。

大丈夫、大丈夫、そう呪文のように唱えてゆっくり歩き出す。

小川のほとりに膝をついて、穢れない清流をのぞみ見た。

きらきら太陽に輝く河川、敷き詰められた丸っこい石。

水面まで伸びる鮮かな藻。

淡い青の水はとどまることをまるで知らない。

水面を滑るように流れていた白い花びらが、渦に飲まれて、消えた。

「・・・っ！」

耐えられなくなってぎぶんっと川に押し入った。

「なんで！？なんで私ばかりこんなっ！」

膝ほどの水位しかないのに、綺麗なこの川は強いちからで私を押し流そうとする。

流されまいと私が踏ん張って真っ直ぐにすすむものだから、その度にしぶきが立った。

今は綺麗な物なんて見たくない。
見たくないのに！

汚してしまおうと、血のついた手を水底についても水流は一瞬でそれを浚ってしまおう。

どんどん水を吸って重くなるチャドル。
ついに私は立つことをやめて膝をついた。

肩までつかればもう起きようという気にはなれなかった。
ひんやりとした水が体温を奪って行って、指先がかじかむ。

このまま流されるのもいいかもしれない。

「・・・ふざけんな」

尻すばみのその声はか細かった。

むらさきは何のいろ？

むらさきはどんないろ？

ぼくは知っている

高貴ないろさ

儂いいろさ

君が慕う 花のいろさ

むらさきは誰のため？

むらさきは王の墓標？

ぼくは知っている

いけにえのいろさ

ときを超えるいろさ

きみが慕う ? 毒のいろさ

*
*
*
*
*
*
*

歌（後書き）

私用が出来たので申し訳ありませんが、しばらく更新できません。
終わり次第連載を再開します。

夢うつ

なにをもってるの？

あら、わたくしはなにももっていないわ。

でもさっきそのフードのしたに剣をかくしたじゃないか。

いいえ、おうじさま。わたくしはなにももっていない。ここでみたことはなにもかもわすれてしまいなさい。

なにももっていないかったの？

はい、なにも。

わすれるの？

ええ、なにかもです。

さあおやすみなさい。いとしいいとしいヴェルダンデイさま。

――――

――――

――――

ハラッ

手にしていた書類が落ちた音で目が覚める。

けぶるような銀のまつ毛をしばたかせてヴェルダンディは日を確認した。

そんなに傾いていない。

どうやら少しの間うたた寝をしていたらしい。

「……白昼夢か」

黒髪の女性が出てきた夢だった。

紫色で大粒の宝石が印象に残る剣は禍々しく、しかし対照的に出てくる女性はとても優しい。

だからヴェルダンディが信じるな、といくら叫んでもすっかり夢の中の幼い彼は騙されて、剣を隠した女性について忘れてしまう。

今ならあれが暗殺の道具だと分かるのに。

今ならのちに血塗られた運命をたどる彼女を、止めることができたかもしれないのに。

戻らない時計の針は今日もコチコチと進んで行く。

「……イーティアノーセ」

がらんとした部屋に響いたその声。

思い出されるは、かの国の妃。

飛び抜けて美しい訳でもなく、どちらかと言うと凡庸な印象を受ける彼女は、この国に鮮烈な衝撃を与えた。

穏やかな笑顔とは対照的に最も卑劣極まりない方法と、理由で。

『私が再び生を成すのに白鳥がいるの。過去ーウルドー、現在ーヴェルダンディー、未来ースクルドー。きつと同じ母の腹から生れ落ち、……そしてまた辿る』

幼き日のヴェルダンディーの髪をなでながら、陽だまりの中そう穏やかに彼女は語った。

おとぎ話を聞いている気分であろうとし始めれば彼女は優しくふふふ、と笑うのだ。

懐いていた、と言ってもいい。

機会があれば、小さなヴェルダンディーは彼女の周りをチヨロチヨロとくつつきまわって、実の母よりも親子らしく甘えていた。

実際、乳母に世話を任せきりの母より彼女の方がずっと好きだった。
？

王子として厳しく教育される中で、彼女だけがヴェルダンディーを子供として扱い、構い、愛した。

慕うのは当然のことで、信用するのも必然だった。

――隠し持った刃に気づきもしないで。

あの夜がすべてを変えてしまった。

国家間の関係から、政治の優劣、果てはヴェルダンディーの心さえも凍てつかせて、その余波は幾人を死に追いやった。

そして今に至る。

いくら考えても取り留めのないことだ、とヴェルダンディは休めていた手を動かした。

何故今更になってあんなことが夢に現れたのかと言われれば、似たような容貌をした少女が例にあげられよう。

似ていた。

髪の色はもちらん、少しの苦難に脆くも壊れてしまいそうな危うさ。

そこで彼は試したくなって、突き放して、そして今ちょっと後悔している。

そんな気難しい顔がますます気難しくなって来た頃、ちりんちりんと入室のベルがなった。

「ヴェルダンディ様、テイルディナックが帰還しました。――重傷を手土産に」

今回の黒目黒髪はどうやらお転婆らしい。

そう思って、ヴェルダンディはまたため息を漏らした。

第五病棟

「・・・今回はなにをやらかした？」

ベッドに横たわった包帯ぐるぐる巻きの自らの護衛を前にでた第一声はそれだった。

半ば侮蔑を含んでいるが、それは護衛こと、テイルの日頃の行いが悪いので致し方ない。

「いやあ、ヴェルダンディ様ったら辛辣う。胸から腹にかけてざっくり切れてんすよ？呼吸するたびに痛いなのって！」

「なら少しは黙ったらどうだ」

「俺はいつもこれ以上ないくらい寡黙でクールな男っすよ」

・・・どの口が言う。

なにも聞かなかったふりをして、ヴェルダンディは医者に具合を伺った。

いつも通りヘラヘラとした態度であるテイルだが、それが見せかけであることも分かっていた。

例え死にかけていようとテイルは軽口をたたく。

難儀なやつだ、と思う。

他人の琴線には挨拶がわりに触れ、生傷を見つければ容赦なく塩を塗り、やっとなふさがった古傷をもう一度開かせる。

それが趣味だと豪語するテイルは、反面自分の弱さをひた隠しにしている。

そういう意味ではレイリーよりもよっぽど頑固だ。

強がりの怖がりだ、と内心ヴェルダンディは位置付けているが、最も二十数年も生きていればいろいろあるのだろうし、そこは暗黙の了解で口にすることはない。

「ええ、命に別状はありませんが、なにぶん素人が斬ったようなので治りが悪いとは思われます」

血に染まった水桶や布が傷の深さを物語っていて、ヴェルダンディは眉をひそめた。

患者よりもびっしりと額にかいた汗を拭って医者は器具を片付けて出ていく。

傷が命に関わらなくても、出血多量で死ぬこともある。

あの様子では危険だったのだろう。

「やだヴェルダンディ様っ！治りが悪いですって！！跡が残ったら責任とって下さいよっ」

「安静にしてろ」

一刀両断とはこのことだ。

ふざける元気があるのなら大丈夫か。

ギシッと音の鳴る簡素な椅子に腰掛けた。

第五病棟の調度品は機能的なものばかりで華美なものは一切を排除されている。

それでもヴェルダンディが座るだけで一枚の絵のようになるのだから、彼自身が最高の調度品かもしれない。

「いいっすよねえ。美形って」

少しひがむ様なティルは意識から外してヴェルダンディはディアナ君女をどう牽制するかに考えをめぐらせる。

秘密裏にティルたちを動かしたとはいえ、敵だらけの城。ある程度の人員をさけばディアナ君女の耳に入らない訳がないだろう。

第一継承者の盾を消すこの絶好の機会にディアナ君女は一体何を仕掛けてくるのか・・・。

ヴェルダンディは思案にふける。

それもバンツと扉を蹴り壊す様な勢いで侵入者がくるまでは。

「ティル、貴様あっ！！素人に切られるとは腑抜けがっ！！」

憤怒をあらわにして入ってきた男はすぐさまティルの胸ぐらを掴む。彼が怪我人だとかなんとかは考えていない。

「ああ、レイリーじゃん」

呑気にそう返すティルが火に油を注ぐのは分かっている。

・・・静な場所に行きたい。

ヴェルダンディはそう願った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9447n/>

笑え王宮

2011年2月16日14時50分発行